

使徒言行録は 28 章で構成されていて、後半はパウロの宣教活動を中心に記録されていますが、前半にペトロの働きと回心を記録しています。ペトロはユダヤ主義者で外国人を汚れた人々と見なして差別していました。しかし、9 章 32 節からの一連の出来事を通して偉大な真理に目覚めさせられ変えられたのです。特に 10 章 1 節から記されている様々な動物が入った大きな布が天から降りて来た幻の体験は大きな出来事でした。

34 節に「神は人を分け隔てなさないことが、よくわかりました」と言っていると書かれていますが、9 章 32 節～10 章 33 節には神様が 5 つの分け隔てをなさないことが記されています。①神様は病気の人と健康な人を区別しない。②死んだ人と生きている人を区別しない。③清いものと汚れたものを区別をしない。④民族や国籍の区別をしない。⑤天と地の区別をしない。大きな布は日本で馴染みの風呂敷を意味します。カバンは入る物の大きさや形を限定しますが、風呂敷は形を問わずそのまま包んでしまいます。ペトロはこの後ローマ軍の百人隊長にイエス様のことを話し、異邦人伝道に出かけました。

高見 順という人の「死の淵より」という詩集に「生と死の境には」という詩があります。「生と死の境には、何があるのだろう。(中略) 生死の境にも美しい虹のごときものがかかっているのではないか。たとえ私の周囲が、そして私自身が荒れ果てたジャングルだとしても」。人間の生と死にも境界線はありません。人間は生きつつ死につつ生きているのです。生の中に死が共存し、死の中に生が共存しています。神様はあるがままの命を包み込んでそのまま祝福し、受け入れて下さっています。

病気や障害を負うことは不自由なことです不幸なことではありません。その不自由を神様が与えキリストが共に担い、その不自由を他の人の不自由を理解する機会とするならその不自由は愛の入り口です。死は全ての可能性が失われる絶望の出来事ではなく、この世に生かされた任務から解放される出来事です。癒すことも生かすことも出来る神様が天に迎えると言われるなら、それは解放の時でなくて何でしょう。全ての者をキリストの十字架の愛の故に清い者として受け入れられる神様が、私達の人生に関わっておられるということは全てに意味とご期待があるということです。新しい年を迎えた私達はどんな状況に置かれても神様のご期待と意味があることを心に刻んで生きて行きましょう。